



草地の生物多様性

問合せ 産業環境課 ☎ (81) 1115

草地は、生えている草の密度や背丈によって3つのタイプに分けられます。草がまばらで土が見える「荒地」、大人の膝ほどの高さの「短草地」、そして肩より高く伸びる「長草地」です。

自然のままが良いように思えますが、草地は放置すると草が繁り、クズなどのつる植物が覆いかぶさってしまいます。こうなると暮らせる生きものが限られ、生物多様性は急速に失われます。そのため、各地で草地を維持するための管理が行われています。箱根・仙石原のすすき草原で春先に行われる「火入れ(山焼き)」も、こうした草地管理の一例です。このように草地は人の手によって維持される「半自然」の環境であるとされています。

中井町でも三つのタイプの草地が見られますが、広大な草原はありません。多くは農地の土手に広がる草地で、農家の皆さんが定期的に草刈りをしてくださるおかげで、私たちは季節ごとの美しい緑を目にすることができます。まさに「里都まち」を支える大切な風景といえるでしょう。

土手の草地では、草刈りによって短草地と長草地が繰り返し現れ、多くの生きものが育まれます。夏に「スイッチョン」と鳴くヒガシキリギリスがいれば、そこは健全な短・長草地の証しです。また、荒地では美しいナミハンミョウや、背中にギザギザ模様のあるイボバッタが目印になります。

こうした生きものが安心して暮らせる草地を守り続けることは、中井町の自然の豊かさを未来へつなぐうえで、とても大切なことだと思います。



ナミハンミョウ



ヒガシキリギリス

ちようちよう発し

その32

「中井やまゆり園」

今年の竹灯籠のタベには、会場の一角で、中井やまゆり園の利用者の皆さまが、自分たちでデザインした灯籠を展示するなど、準備段階から初参加されました。

中井やまゆり園は、今年4月に発足した地方独立行政法人神奈川県立福祉機構のもと、新体制に移行し、数年来取り組んで来た当事者目線の障害福祉の実現に向け、本人の意思や思いを汲み取っていく「当事者研究」、暮らしの充実や支援の効果を確認する「福祉を科学する」を柱に据え、「福祉のフロントランナー」を目指します。

10年前、津久井やまゆり園で起きた痛ましい事件は、「ともに生きる社会とは何か」を私たちに問いかけました。それに向き合い続けた神奈川県歩みが、このように結実したことに、大きな意味を感じていますし、深く共感しています。

といいますが、わたし自身も重度心身障害者のデイサービスで働いていたことがあります。保育園園長を務められた方が、障がいを抱える息子さんとその同級生のために、養護学校卒業後の場作りを考えて開設されました。重度後遺障害を負った方も通う中、利用者の思いやご家族の願い、そして職員のあり方を徹底して学ばされました。全介助が必要で、意思表示がし



にくい方に対しては、動作や音楽の好みを家族などに聞き取りながら、手の可動域や視線の範囲を見極め、目線の中で自分が何をしているかが伝わる支援に努めました。笑顔でトントんとリズムよく両手を打ちながら喜ぶ利用者の姿が忘れられません。そうした経験からも職員がやりがいを感じながら、その矜持を維持更新できる職場づくりは極めて重要だと思います。

もう一つの柱は「地域」です。きんもくせいひの会の夏祭りの踊り指導、更生保護女性会や民生委員、ゆめくらぶなかいや食育ボランティアなどによるやまゆり祭などの活動の他、近年では、JAかながわ西湘青壮年部中井支部の指導による、町内畑を借りての小麦づくりや収穫祭、さらには町施設を使つての日中活動など、町民の皆さまとのつながりが一層深まっています。

今回、竹灯籠のタベへの参加にあたり、やまゆり園の皆さまにとつて夜の外出はこれまでほとんどなかったと伺いました。福祉の理念上の「地域」を越え、町内に中井やまゆり園がある意味を常に考えてきました。同じ町で暮らし、同じ季節を感じ、同じ灯りを見つめる。そうした日常を重ねていくことから始めればいいんだと改めて思いました。